

# 自然環境といえる

## 「ラ・マンチャの風車」

千葉大学大学院工学研究科都市環境システムコース准教授  
一般社団法人 洗楓座 代表理事

佐藤建吉

「ラ・マンチャの風車 ほど、自然環境と合致した風車はない」といって過言ではない。実は、人工物である風車が、自然環境となつているとさえいえる。

プターナ (Campo de Criptana) を訪ねたのは、今から18年も前になる。最近のツールである youtube で現地情報を見ると、当時を懐かしく思う。少し様子が変わったがほとんど同じように見える。

その地には、マドリッドから鉄道で出かけた。2時間くらいでカンボ・デ・クリプターナ駅に着く。その駅前に、千葉市の木として制定されているキョウチクトウが咲いていたので、嬉しくなつたことを思い出す。

街中を10分も歩くと、住宅の屋根越しに風車の姿が見えて来た。私は、イギリスの粉挽き風車を90基以上も現地調査したことがあるので、風車には驚きはしないが、この地のそれは、冒頭に書いたように、未体験の相を見せてくれた。少し歩くと小高い丘が平坦に広がり、10基の風車が、間隔をおき立っているさまを見るのができた

(写真参照)。

最初の風車が、内部を公開していたので、地階から階上にならせん階段で登ると、粉挽き臼や歯車仕掛けなどを目にすることができた。また小窓越しに外部を覗くと、他の

風車群や先ほど歩いてきた住宅街の様子を見ることができた。かつて、この小高い丘には、30基を超える風車があったという。

十字軍から帰つた兵士たちが、集約化して穀類を供給す目的で、マルタ島の様式の風車を伝えたもので、この地が一番の生産拠点であつたろうと思いを巡らせた。現在残っている10基の風車は、400年以上も遡る16世紀からの重鎮である。それらは、白黒に化粧され、観光の目玉となつている。その中には、映画映写機の展示がされている風車もある。地元出身者が、ハリウッド映画の監督として活躍したというので、映画関連のミュージアムに仕立てられていた。土地柄であるがワインのミュージアムとなつているものもある。それぞれの風車には、

地元と由来の人物や土地の名前が冠されている。LA GARTO (案内、QUIMERA (固有名詞・キメラ。ギリシア

つづいて。

神話の怪物)、INCA GARCILASO (人名・歴史家・文筆家) などである。

この地、カンボ・デ・プターナのラ・マンチャの風車において触れなければならぬのは、セルバンテスの『ドン・キホーテ』との関りである。登場する風車のモデルが、この地であつたので、そのアート作品も設置されている。駅前には著者セルバンテスの銅像と、ドン・キホーテが戦つたという風車の羽根の彫刻がモニュメントとな

つづいて。ラ・マンチャ地方には、コンスエグラにも同様の粉挽き風車がある。町全体が、石組み造りの白壁、そして赤屋根の住宅やアパート風、マンション風、さらにビラ風の建築物は、十分に古きを残して新しい様相を取り入れた外観を呈している。それは、土地の持つ余裕やゆとりが提供しているともいえる。

スペインは、いま風力発電が世界第4位の設備保有国となつている。広い国土面積と半島という地勢を生かした自然エネルギーによるエネルギー自給と、風力発電設備の輸出産業を進めている。その背景にラ・マンチャの風車がいい貢献をしていると言えらるだろう。



自然環境となつている「ラ・マンチャの風車」

材あり、風を受けるために8〜15度の傾斜角を設けている。材料には、樫の木やポプラなどが用いられている。その風車は、もちろん粉挽き風車である。

筆者が、その地であるスペインのラ・マンチャ地方のカンボ・デ・クリ